

# デジタル時代のオルタナティブ・メディア研究

## —2000年以降の欧米先行研究から再考する 「オルタナティブ」の概念と定義—

藤原 広美<sup>i</sup>

オルタナティブ・メディア（以後 Alternative Media = AM）研究は、昨今、理論化が進展し、旧来の「主流 vs オルタナティブ」という単純な二項対立的な方法から脱却した新たな枠組みで考察されるようになった。本稿は、Atton (2007) の先行研究をベースに、2000年以降の欧米 AM 研究の主要論文・著作の概要を整理・分析して、未だコンセンサスのとれていない AM の総括的な定義づけと、現時点における AM の分類を試みた。AM の概念と定義を再考することで、デジタル時代の AM 研究の最新動向や課題を浮き彫りにした。本稿では、AM を様々な目的・特徴を持つメディアの集合体と捉え、AM を表現する様々な呼び名が採用している領域と、強調されているコンセプトをリストアップし、5つに類型化した。それらは、(1) 社会・政治変革を目的とする「ラディカル & 社会運動のメディア」、(2) 寡占化・グローバル化する「支配的メディア権力への対抗勢力」としての AM、(3) 対抗的公共圏を作り出すことを目指す「批判的メディア」、(4) 自分たちのメディアを持つことでエンパワーメントしてく「市民メディア」、(5) ネット時代の新しいジャーナリズムの実践である「オルタナティブ・ジャーナリズム」である。

キーワード：オルタナティブ・メディア、類型化、ラディカル・メディア、社会運動のメディア、批判的メディア、対抗的公共圏、市民メディア、オルタナティブ・ジャーナリズム

### はじめに

オルタナティブ・メディア（以後 Alternative Media = AM）は、一般的に大手新聞社やテレビ局などの主流メディアに対する代替的なメディアと理解されている。典型例として、地域住民のための情報を流すコミュニティ・ラジオや、CATVで放送されている市民制作の番組があげられる。最近では、インターネットをベースにした独立形のニュース・サイト、情報提供を目的としたブログや SNS なども AM

に含めている研究者もいる<sup>1)</sup> (Bailey, Cammaerts & Carpentier 2007; Atton 2007; Lievrouw 2011; Kenix 2011)。

メディア研究としての AM は、20世紀まではほぼ未開拓の研究領域であり、社会科学のなかでも評価の低い学問分野であった<sup>2)</sup> (Fuchs 2010; Downey & Fenton 2003)。しかし2000年以降、主に米国・英国で AM に関する事例研究、理論研究がすすみ、今日までに、ある程度まとまった数の研究成果が発表されるようになってきている (Atton 2007)。

AM は、主流メディアのコンテンツやオーディエンスと多くが異なっているだけでなく、設立目的から組織形態、構成メンバー、配信方法・媒体まで、

i 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

まさに多種多様である (Atton 2002a; Bailey, Cammaerts & Carpentier 2007)。それゆえに、どのようなメディアがこの領域に該当するのかも含め、コンセンサスのとれた定義や区分が未だに存在していない。事実、この領域のメディアを指す名称は多数あげられており、現在も AM が確立された呼び名になっているわけではないが、本稿では AM が最も総称的な意味合いを持つことから、この名称を使用する。

未だ確定されていない AM の定義づけや区分は、インターネットの台頭によって、更に困難の度合いを増している。メディア技術のコンバージェンス (収斂・融合) が、主流メディアと AM の間の区別も曖昧にしてしまったからである (Jenkins 2006; Kenix 2011)。ネット上では、主流メディアのコンテンツと、AM のコンテンツが混在し、利用者はどちらも分け隔てなく手に入れることができるし、近年では、利用者はコンテンツの出所がどちらなのか、気に掛けずに情報を消費する傾向もでてきている。

インターネットが登場する以前は、インフラ準備や組織づくり、資金集めなど、AM を設立するまでのハードルは決して低いものではなかった。AM 従事メンバーは、現在、総じてイメージされがちな「一般市民」より、むしろ Pippa Norris (1999) が「批判的市民」と呼んだ市民意識の高い人びと、さらに社会運動活動家たちが多くを占めていた。近年になって、誰もが簡単に情報発信できる情報伝達のプラットフォームやアプリが登場したことで、技術的にはパソコンやデジタル・メディア端末さえあれば誰もがブログや SNS を通じて AM<sup>3)</sup> を始められるようになり、まさしく「一般市民」が従事しやすくなったと言える。

主流メディアから一方的に提供されるコンテンツを消費するだけの受け手が、自ら情報発信できるようになり、AM が内包する民主的なメディアとしての可能性が大きく開かれた (Curran 2010)。他方、AM がコモディティ化するというデメリットも同時に生まれたように見える。ここでのコモディティ化

とは、誰もが日常的に AM を受発信できるようになることを含意しており、受け手も送り手も、ある情報が「オルタナティブ」だと差別化したり、意識したりすることが難しくなってきたことを指す。また流通するコンテンツも、かつてはアングラ出版や海賊ラジオなど発信される媒体自体から AM だと認知することができたが、昨今では玉石混交のインターネット空間という混沌とした情報回路に主に存在するようになり、歴史的に引き継がれてきた AM の精神が希薄化されているようにも感じられる。

この傾向は、研究領域からも見て取れる。イラク戦争のブログ記事、「アラブの春」や「ウォール街を占拠せよ」などの草の根運動を、一般市民参加の大きなムーブメントに発展させた SNS の役割が目され、新しいデジタル・メディア技術とそれが政治や社会に与える影響に焦点をあてた研究が世界レベルで進んでいる。

なかでも、インターネットが民主主義に果たす役割については世界中で数多くの研究が行なわれている。特徴的なのは、インターネットの技術が様々な変革を可能にするという、技術決定論的な視点での研究が散見される点であろう。一方、「情報の民主化」をもたらすインターネットの機能を、歴史的文脈のなかで AM の実践として捉える研究は、少数に留まっているとみられる。本稿は、そのような AM を取り巻く、新しい状況への変化に対する期待と懸念から出発している。

## I. AM の定義づけの必要性

これまでのメディア研究では AM を主流メディアの対極に置いたり、中には AM 定義づけなど無意味だと主張したりする研究者もいた。本稿では、AM の定義づけを放棄するという立場をとらない。なぜなら、AM というメディア領域を総括的に表す言葉や定義がない限り、その存在意義や重要性を論理的に主張することができないからである (Gibbs & Hamilton 2001)。

Dagron (2004) は、AM は現在も進行中のプロセスと捉えており、AM の厳格な定義づけには否定的である。これまでAMを型にはめて定義・分類してきたことで、AMの生き生きとした、常に進化しているプロセスを「フリーズ」させてしまったかもしれないというのである (Dagron 2004)。

インターネットの登場で、AMの定義や分類方法は変化してきている。従来のような型にはまったAMの定義や分類は、常に変化し続けているAMの特徴やその潜在性を見逃す原因にもなりかねない。そこで本稿では、従来の分類方法と理解のされ方に疑問を呈し、それに変わる新たな分類方法を探求していききたい。

またAMの定義づけや分類化にあたり、本稿では、AMを歴史的視座から見ていくことの重要性を強調したい。Gibbs & Hamilton (2001) が指摘するように、AMを歴史的視点から見ていくことによって初めて、この領域のメディアが決して最近生まれたのではないことを認識できるだけでなく、その実践には非常に幅広く多様な目的やゴールが含まれていることを深く理解できるからである<sup>4)</sup>。

これらの前提を踏まえて、本稿では、Atton (2007) や Kenix (2011) らに倣い、AMを、メディア領域を横断したメディア組織の「集合体」と捉える。そしてAMを、「民衆(=一般の人びと)の代弁者としての歴史的継続性を持ち、支配的メディア・システムや言説への対抗、民衆の声の代弁、メディア権力のバランス調整、メディアを使った政治・社会変革、既存ジャーナリズムへの挑戦など、多様な目的を実現する潜在的可能性を持つ多元的なメディアの集合体」と位置づけ、その解釈に幅を持たせる定義を前提にしたい。

## II. AMの分類化——先行研究レビュー

2000年以前のAM研究は、主流メディアと比較したうえで、相違点を明らかにするという枠組みにおいて、AMの最大公約数的な特徴を導き出すという

分析が主流であった。しかし2000年以降はAMの理論化が進展し、これまで何人かの研究者 (Atton 2002b, 2007; Bailey, Cammaerts & Carpentier 2007; Fuchs 2010; Lievrouw 2011) が、旧来の「主流 vs オルタナティブ」という単純な二項対立的な方法から脱却した新たな枠組みでAMの分類を試みるようになった。以下では、そのなかから主要な先行研究を概観する。

### 1. Baileyらの機能別4アプローチ

Bailey, Cammaerts & Carpentier (2007) は、AMを特徴づける機能に着目し、主要な機能を4つのアプローチで分類している。

- ①「コミュニティに奉仕するメディア」のアプローチでは、「コミュニティ」との関わりに着目し、コンテンツ制作とメディア組織におけるコミュニティのメンバーの議論と参加をAMの中心機能に据えている。
- ②「主流メディアの代替物としてのAM」のアプローチは、AMによる対抗的コンテンツの提供を強調している。「主流メディア」は、階層的組織を持ち、支配的言説を配信するという点で特徴づけられる公共メディアもしくは大規模な商業メディアと定義される。一方AMは、「主流メディア」を代替するメディアという点が強調され、小規模で、独立した、非階層的な形態で、非主流的な言説を制作・配信する点が特徴として挙げられている。
- ③「市民社会との結びつき」を強調するアプローチでは、市民がAMにミクロレベル、マクロレベルで参加することで「メディアが民主化される」という機能と、メディアを通じた公的議論への参加と公共圏の形成によって「政治過程が民主化される」という機能が強調されている。
- ④「リゾーム(地下茎)としてのAM」と捉えるアプローチは、ドゥルーズ & ガタリ (1987=1994) の「リゾーム<sup>5)</sup>」の概念を援用している。そこでは、別々の抗議グループや社会運動同士を連結させたり、地域の活動を世界的な活動と繋げたりなど、AMが

リズムのように、既存の体系にとらわれずに様々なグループと関係性を作り上げるという機能が強調されている (Bailey, Cammaerts & Carpentier 2007)。

## 2. Fuchsのプロセス重視／コンテンツ重視のアプローチ

Baileyら(2007)が提唱する4つのアプローチについて、Fuchs(2010: 177)は、分類の定義が恣意的で、既存の社会理論に立脚していない点を批判している。そのうえで、ギデンズ(1986)の主観主義と客観主義、弁証法的社会理論を援用し、既存の社会理論に基づいたAMの理論化・分類化を試みている。

そこでは、主観-客観の概念によって、AM理論をプロセス重視のアプローチとコンテンツ重視のアプローチという枠組みで区分している。前者では、市民参加が可能で自己組織的な制作プロセスを特徴の中心に置くことで、小規模なコミュニティ・メディアでの実践が強調されている (Fuchs 2010: 177)。

このようなプロセス重視のアプローチでは、プロとして活動している対抗的なAM組織を除外してしまうばかりか、アマチュアによる小規模なAMでの活動では政治変革につながるような対抗的公共圏の形成は難しいとFuchs(2010: 177)は指摘し、コンテンツ重視のアプローチを優先させた視点を提示したのである<sup>6)</sup>。

その背景には、たとえAMによって、市民がメディア制作者となり多元的なメディア環境が達成されたとしても、僅かな人にしかその声が届かなかったら、メディアによる民主化には繋がらないという考え方がある。Fuchs(2010: 178)は、むしろそのような状況に甘んじることは、主流メディアが、収益、権力、受け手、影響力を独占し続ける状況を正当化することに繋がってしまうと指摘している。

## 3. Lievrouwのジャンルによる5つの分類

Lievrouw(2011)は、ネット時代のオルタナティ

ブなメディア・プロジェクトを「オルタナティブ／アクティビスト・ニューメディア」と名づけ、ニューメディア、特にオンライン・メディアを使ったAMを、テレビ、新聞など伝統的なマスメディアを使ったものと区別して定義・分類を行なっている<sup>7)</sup>。

ネット時代のAM分類に際し、Lievrouw(2011)は「ジャンル」の概念を援用している。「ジャンル」は、集合的アイデンティティ(あるいは定義)が、内容の目標、形式、意味と関連している場合、分類を行なうのに適用できる (McQuail 1996=2010)。「ジャンル」は利用者の環境や興味によって変化するアクティブでダイナミックなコミュニケーション様式・表現を分類できるうえ、移り変わりの早いネット時代に相応しいとした上で、「ジャンル」別にAMを5つに分類している (Lievrouw 2011)。それらは以下の示した(1)カルチャージャミング、(2)オルタナティブ・コンピューティング、(3)参加ジャーナリズム、(4)動員の媒介、そして(5)共通知識である。

①「カルチャージャミング」は、大衆/主流文化、特に企業資本主義、商業主義、そして消費主義を批判するジャンルで、メディア・アーティストや活動家が、広告などの大衆文化の要素を使って、皮肉的・破壊的な視点から行なう制作活動を指している。

②「オルタナティブ・コンピューティング」は、コンピュータ利用に関係する領域で、情報や情報技術へのアクセスを抑制する商業的・政治的な勢力に反対する広範な活動を指している。このジャンルには熟練したプログラマーやエンジニアが関わっており、「ハクティビズム」と呼ばれる、組織や企業の悪行を暴露する非合法的なハッキング行為から、フリー&オープンソース・ソフトウェアの開発・普及まで、幅広い領域を含んでいる<sup>8)</sup>。

③「参加ジャーナリズム」は、オンライン上で実践される、オルタナティブでラディカル／批判的なニュース組織の活動である。主流メディアで報道されないグループやイシューを取り上げて、公共的、市民のための、参加型／「オープンソース」ジャー

表1 オルタナティブ&amp;アクティビスト・ニューメディアのジャンル

ジャンル	Social domain (扱う領域)	形態	目的
① カルチャー・ジャミング	大衆文化, メインストリーム・メディア, 企業広告	大衆文化の適切なイメージ, サウンド, テキスト	文化批判, 政治・文化解釈
② オルタナティブ・コンピューティング	コンピュータの利用, 電信, メディアインフラ (ハードウェア & ソフトウェア)	ハッキング, オープンソースのシステムデザイン, ファイルシェアリング	情報, ITのオープンアクセスとその利用
③ 参加ジャーナリズム	レポート (記事), ニュース, コメンタリー, 世論	オンライン・ニュース・サービス, ブログ, インディメディア	主要メディアで報道されないグループや 이슈をカバーする。調査報道
④ 動員の媒介	社会運動, アイデンティティ, 政治文化, ライフスタイル	ソーシャルメディア, フラッシュモブズ, 仮想世界, ブログ	アクティビストの動員, ライフスタイル
⑤ 共通知識	専門知識, 学問 / 技術領域・機関, 社会に公認された知識	タグ付け, ブックマーク, wikis, クラウドソーシング	「アウトサイダー」の動員, アマチュア知識, 多様で複雑な知識の包括的な集積とそれを行う機関

(出典: Lievrouw, *Alternative and activist new media*, 2011年 p.23)

ナリズムの実践と理念を指している。このジャンルに含まれるのは、オンライン・ニュース・サービス、ニュースや意見を扱うブログで、既存のジャーナリズムや報道機関の伝統や特権を批判している。

④「動員の媒介 (mediated mobilization)」は、政治的 / 文化的組織や社会運動の領域に関連している。このジャンルは、SNS、個人のブログ、フラッシュモブズのようなオンライン上のソーシャル・ソフトウェア・ツールを使ってネットワークを構築し、リアルな、もしくはネット上の集団的行動に参加する人びとを動員するために活用されるメディアを指している。

⑤「共通知識 (common knowledge)」は、知識や専門性の特徴、情報がどのように体系化され評価されるのか、そして誰によって判断されるのかに関連するジャンルである。検索エンジンやタグ機能などの新しいツールによって、専門知識がなくても情報収集が可能になり、自分の尺度で情報の評価や分類ができるようになった。このような背景から「フォークソノミー」<sup>9)</sup>の成長が育まれていった。このよう

な下からのボトムアップの分類スキーム<sup>10)</sup>は、時に専門家による情報収集・分類へのチャレンジとなり、批判的な役割を担うこともあるという。

#### 4. Attonの主要コンセプトによる4分類

Atton (2007) はAMを、「幅広いメディア領域のなかで様々な機能を持つ、独立した、しかし相互に関連する集合体」と捉え、主流メディアの外側でコンテンツ制作しているメディア組織をAMと捉え、抗議グループや反体制活動家たちが運営する硬派なメディアだけでなく、ファンや趣味のグループなどの「ソフトな」メディアも含めている<sup>11)</sup>。そしてAMの主な機能は、「社会で日の目を見ないグループの視点やニーズを代弁すること」だとしている (Atton 2007)。

Atton (2007) は、既存の社会理論に依拠するのではなく、AMの主要論文をメタ分析することでAMの分類を試みた。分類の際、主要研究論文が(1)どのようにオルタナティブな「メディア」や「コミュニケーション」を概念化し、そして(2)それぞれの

概念がどのように社会的、文化的実践と関連しているのかに焦点を当て、AMを表現する呼び名、採用している領域、強調されているコンセプトをリストアップした。

Atton (2007) は、これらの中から、(1) ラディカル・メディア、(2) 社会運動メディア、(3) 市民メディア、そして(4) 市民ジャーナリズムの4つを、AMの最も特徴的なコンセプトとして選出し、類型化している。このAtton (2007) の研究の特徴は、AMそのものではなくAMの研究成果を分析対象としたことで、それぞれ多様な視点から散発的に行われてきたAM研究の概念整理の限界性を超えてAM研究の現状を考察した点であり、極めて意義深い。

### Ⅲ. 本稿が目指す分類方法

これまで見てきた4つの先行研究の分類方法は、多面性を持つAMを理解する上で、それぞれが有益なガイド役を果たしている。しかし、AMが時代とともに変容する「現在進行中のプロジェクト」(Dagron 2004)である以上、AMの多種多様な機能、目的、コンテンツ、組織形態などを網羅的に分類するのは難しく、AMの変容とともに分類法も変容せざるを得ないだろう。これは、テレビ、新聞など個々の「メディアのカテゴリーは何らかの技術の所産なのではなく、そもそも社会的実践の絡まり合いのなかで構成されてきた」もので、技術の発達や社会の要請によって変化しつづけるものであるからこそ、既存のメディア・カテゴリーに縛られた思考に留まってはならない、と指摘する吉見(2004)の視点にも呼応する。

これらの指摘を踏まえ、本稿ではAtton(2007)に倣い、AM研究の主要論文・著作の概要を整理することで現時点におけるAMの分類を試み、そうすることによってAM研究全体の最新動向や、課題を浮き彫りにする。具体的な研究手法としては、Atton(2007)の先行研究をベースに、それぞれの研究でAMを表現する呼び名が採用している領域と、強調

されているコンセプトをリストアップし、メタ分析の手法で類型化を試みている。

分析対象は、2000年から2014年に発表されたAMに関する主要論文・著書のうち、33編を選んだ。この期間にしたのは、2つの理由による。一つは、2000年を境に、AMの初めての入門書 *Alternative Media* (Atton 2002a)をはじめ、AM研究の先駆的著書 *Radical Media* の改訂版 (Downing, et al. 2001)、市民メディアの概念を提唱した著書 *Fissures in the mediascape* (Rodriguez 2001) など、主要なAM研究が次々と出版され、それを契機にAMが一つの学問領域として確立していったからである<sup>12)</sup> (Atton 2007)。

二つ目の理由は、2000年以降、かつて主流だったAMと主流メディアを相互排他的な二項対立として捉える視点到に慎重になるべきとの指摘がなされたことで (Hamilton 2000; Atton 2002b; Downing, et al. 2001, Kenix 2011)、特にジャーナリズムの実践における、主流メディアとAMの関係性が新たな研究テーマとして発展してきたからである (Kenix 2011)。

分析対象となった論文における、この領域のメディア実践の呼び名は、オルタナティブ・メディア (Hamilton 2000; Gibbs & Hamilton 2001; Hamilton & Atton 2001; Atton 2002a; Couldry & Curran 2003; Downey & Fenton 2003; Dagron 2004; Waltz 2005=2008; Vatikiotis 2005; Bailey, Cammaerts, & Carpentier 2007) 以外に、市民メディア (Rodriguez 2001; Schaffer 2007)、コミュニティ・メディア (Carpentier & Servaes 2003; Jankowski 2006)、民主的メディア (Carroll & Hackett 2006)、ラディカル・メディア (Downing, et al. 2001; Atton 2002b)、社会運動メディア (Platon & Deuze 2003; Waltz 2005=2008; Lievrouw 2011)、批判的メディア (Fuchs 2010)、戦略的 (tactical) メディア (Bruns 2003)、エスニック・メディア (Deuze 2006)、オルタナティブ・ジャーナリズム (Harcup 2003, 2005, 2013; Atton & Wickenden 2005; Fenton 2009; Atton & Hamilton 2010; Curran 2010; Forde 2011; Allan

2013), 市民ジャーナリズム (Atton 2002a, 2007), 参加ジャーナリズム (Singer 2011; Domingo, *et al.* 2008), 草の根ジャーナリズム (Gillmor 2006) などがあった<sup>13)</sup>。

これらの名称は、主流メディア以外のメディアが持つユニークな特徴を概念化したものである。それぞれ強調されているコンセプトは、呼び名ごとに異なっているものの、部分的に重複する要素が存在し、相互補完的な関係にあった。しかし、これらの様々な呼び名をまとめて、主流メディアに対抗する一つのメディアとして提示するのは、物理的にも難しいし、なによりAMが元来持つ多面性を矮小化することになってしまう。

そこで本稿では、AMを様々な目的・特徴を持つメディアの集合体と捉えることとする。そして、Atton (2007) が類型化した (1) ラディカル・メディア、(2) 社会運動メディア、(3) 市民メディア、そして (4) 市民ジャーナリズムという4つの分類をベースに、本稿が分析に加えた最新の論文レビューを加えて、以下の通りに再類型化した。

一つ目は「ラディカル & 社会運動メディア」で、この二つは、多くの特徴が重複していたため、本稿では一つにまとめた。二つ目は「支配的メディア権力への対抗勢力」(Curran & Couldry 2003; Couldry 2002; Dagron 2004)、三つ目は「批判的メディア」(Fuchs 2010)、四つ目は「市民メディア」(Rodriguez 2001; Schaffer 2007)、五つ目は「オルタナティブ・ジャーナリズム」(=オルタナティブ・メディアが実践するジャーナリズム) (Harcup 2003, 2005, 2013; Atton & Wickenden 2005; Fenton 2009; Atton & Hamilton 2010; Curran 2010; Forde 2011; Allan 2013) である。これら5つは、それぞれが完全に独立しているわけではなく、重複した部分も含まれている。

以下では、リストアップしたコンセプトを類型化した上で、それぞれが強調する特徴を分析していく。そして、AM研究の今後の克服すべき課題についても考察し、今後この領域の研究をどのように発展さ

せていったらよいか最後に議論していきたい。

#### IV. 主要研究論文・著作 (2000年~2014年) から類型化した5つのAM

##### 1. ラディカル・メディア & 社会運動メディア

AMを歴史的な視点から見ると、その領域に含まれるであろうメディアは、かなり昔から存在していたことが示唆されている (Kessler 1984; Hamilton 2000; Hamilton & Atton 2001; Dagron 2004; Atton 2002a)。AMを社会変革のプロセスと相互関係を持つメディア (Downing, *et al.* 2001; Dagron 2004) と捉えるならば、「ラディカル・メディア」、および「社会運動のメディア」というコンセプトは、最も初期のAMに内包されていたのだと言えよう。

AMの歴史は、古くは清教徒革命 (1641-1649)、アメリカ独立戦争 (1775-1883)、フランス革命 (1789-1799) の時代まで遡ることができるという研究者もいる (Dagron 2004; Hamilton & Atton 2001)。もちろん当時はAMという名称は存在しなかったが、その時代のメディアが社会変革を目的とし、人びとを行動へと駆り立てたのであれば、その存在意義や機能は、まさに現代のAMに該当するといえるだろう。

近代においては、米国での1960年代以後の公民権運動やベトナム反戦運動、新左翼、フェミニズム運動など、政治的・経済的な支配勢力やグローバル化に対する抵抗運動や多文化の社会運動の台頭によって、「ラディカル・メディア」、「社会運動のメディア」としてのAMの存在が知られるようになった (Downing, *et al.* 2001; Gibbs & Hamilton 2001; Platon & Deuze 2003)。

Downing (2001) は、AMの価値は政治的、社会的変革へのポテンシャルにあるとして、そのようなラディカルなメディアを、ある特定の政治的、社会的変革のための活動を通じてコンテンツが制作される、社会運動のためのメディアと捉えた。そして、その

ようなメディアにおいては、メッセージの内容だけではなく、そのメディアがどのように組織されているのかが重要であるとし、AMの役割は、自ら制作するコンテンツで現体制に対抗するだけではなく、主流メディアの制作手法や組織形態に対しても異議申し立てをすることだと指摘している(Downing, *et al.* 2001)。ラディカル・メディアの目的が社会変革や政治変革に影響を与えることであるなら、そのことは重要である(Atton 2007)。

その一方で、ラディカルな社会運動のメディアという部分が強調されることで、AMは左翼運動、転覆運動、革命運動の一部だと一方的にラベルづけされ、「民主的」な社会を不安定にし、「自由なメディア」を脅かす存在として、悪意ある中傷に晒されることにもなった(Dagron 2004)。反社会的で過激なメディアとラベルづけされることで、AMにネガティブなイメージが植え付けられた点は否めない。このような批判に対し、Atton (2002a)は、AMをラディカル・メディアに限定するのではなく、「ミニコミ誌」「ファン同人誌」「ブログ」なども含めるべきとし、AMは新しい文化表現のメディアも含む広範囲なメディア領域であるべきだと主張している。

## 2. 支配的メディア権力への対抗勢力としてのAM

Couldry & Curran (2003: 7)は、AMの実践は、主流メディアにメディア権力が集中しているメディア空間のアンバランスな状態を調整する役割にある点を強調している。この概念での「オルタナティブ」という表現は、主流メディアと比較する際に対応する言葉であり、AMが集合体となることで、主流メディアに対抗するメディア勢力になりうるという点が強調されている。

このコンセプトが台頭したのは、新自由主義の台頭による規制緩和によって、メディア企業の寡占化やコングロマリット化、それに伴って行き過ぎた商業主義が進んだことへの反動から、それを批判・対抗するAMの存在が研究テーマとして多く取り上げられるようになったという社会背景がある。

Couldry (2002)は、AMを自らの空間で何らかのパワーを生みだすことができる社会的プロセスだと捉えており、AMが民主的なコンテンツを発信することで、現状への異議申し立てをすることが可能になると主張した(Couldry 2002: 25)。そして、主流メディアの慣習や、それが代表するものに対抗するリアリティを、AMが構築(および再構築)できる潜在性を持っていると考えた。これはピエール・ブルデュー(1991)の「象徴的権力が、リアリティを構築する」という概念を発展させたもので、市民が参加するアマチュア・メディアの制作は、組織化されたプロのメディア権力に対する抵抗であり、象徴的な言説・形態を生産(またそれらを再生産)するメディア権力の独占に対する異議申し立てだと理解することが可能だとしている(Couldry 2002; Atton 2010)。

また、このような役割を持つAMは、メディアの多様性という文脈のなかでは、民主主義のシステムを機能させるうえで必要な言論の多様性を担保する媒体として捉えられている(Curran 2011; Hamilton 2000: 373; Kenix 2011)。ここでの主流メディアとの明確な違いは、AMは社会のなかに存在する多様性を尊重し、他の意見や価値観を持つ人びととの相互理解を促進することを目的としている点であるという(Kenix 2011)。

## 3. 批判的メディアとしてのAM

一方、Fuchs (2010)は、AMは必ずしもラディカルである必要はないものの、単なる主流メディアに代替するメディアの実践として捉えるのではなく、支配的な社会(および言説)に疑問を呈する「批判的メディア」として理解されるべきだと主張した。そして、「批判的メディア」としてのAMの目的は、現体制への批判であり、政治改革だとしている。それゆえに、AMを、ロドリゲスの「市民メディア」のように「参加」や「セルフラーニング」といったプロセスを重視すると、小規模なコミュニティ・メディアに重点が置かれてしまい、プロと同様の手法で

AMを実践している対抗的メディアを除外してしまうだけでなく、受け手が少数なので政治改革の可能性が殆ど期待できなくなってしまうと批判している。

このため Fuchs (2010) は、AMのプロセスではなく、AMが制作するコンテンツに注目している。そして対抗的公共圏 (Negt & Kluge 1972=1983; Downey & Fenton 2003) の概念を援用して、AMのコンテンツの理論化を試みている。そして、批判的なコンテンツを制作する「批判的メディア」は、「批判的公共圏」の概念と結びついているとし、AMを対抗的公共圏におけるコミュニケーション的側面と捉えている (Fuchs 2010)。

ここでの対抗的公共圏は、Habermas (1962=1994) が初期の著作で概念化した議論空間としてのブルジョア公共圏<sup>14)</sup> に対立するものとして定義されている (Negt & Kluge 1972=1983)。そして「批判的メディア」が制作したコンテンツは、抑圧されたグループや人びとが現体制や現実社会へ抗う声や、変革の潜在性・可能性を表現したものであるという (Fuchs 2010: 182)。

「批判的メディア」は、批判的なメディア・コンテンツの存在が必要不可欠である一方で、市民参加、メディア所有者の独立性や自律性、代替的な配信手段などについては、そのような特徴を持つことは望ましいものの、必須条件ではないとしている (Fuchs 2010: 180)。

さらに Fuchs は (2010: 183)、AMは主流メディアで実践されている戦略やプロのマーケティング手法を全面的に否定すべきではないと主張している。むしろ、より多くのオーディエンスに情報を届けるためには、商業メディアの戦略や手法を利用しても構わないという。対抗的公共圏における「批判的メディア」の役割は、支配的な社会 (および言説) に疑問を投げかけることである以上、分断された闘争を支援し特定の関心事を扱う小規模なメディアが多数あるよりも、数は少なくとも広範囲の人びとがアクセス可能で影響力を持つ大規模な「批判的メディア」のほうが効果的であり、望ましいとしている

(Fuchs 2010: 186)。

「批判的メディア」としてのAMは、目的こそ「ラディカル・メディア」や「社会運動のメディア」と同じ「現体制への批判」であり「政治改革」であるが、その実践手法はかなり実用主義的であり、社会的な影響力を持つ対抗的公共圏を作り出すためには、従来の「オルタナティブ」なやり方にこだわる必要がないという点で、他のAMの実践とは一線を画している。

#### 4. 市民メディア

Rodriguez (2001) が提唱する「市民メディア」は、Fuchs (2010) の「批判的メディア」のコンセプトと、対極にあるといえる。Rodriguez (2001) は、普通の人びとが自分たちの手で自分たちのためのメディアを作り上げることで、初めて自分自身や自分たちのコミュニティの声を代弁 (represent) することができる考えた。そのような「市民メディア」を通じて、「一般の」市民はエンパワーメント (=与えられた目標を達成するために、組織の構成員に自律的に行動する力を与えること) されていくとしている。

Rodriguez (2001) は、市民たちのメディア制作の体験は、それを通じて自ら学んでいく教育のプロジェクトと捉えていた。教育の手段という側面では、パウロ・フレイレ (1970=1979) の「意識化」 (=教育を個人や社会の意識的な形成のための手段として用いる試み) と批判的教育学の理論を、そして、民主主義の手段という側面では、シャンタル・ムフの「ラディカル・デモクラシー」(1992) の概念を「市民メディア」の定義に取り入れている (Rodriguez 2001: 19-20)。

そして、「市民メディア」を古典的な意味でのメディア、つまり人びとに情報を提供し、影響を与えるコミュニケーションの媒体としてだけでなく、メディアを通して自ら学んでいくという学びの手段として、また、人びとが自分たちの住むコミュニティの様々な問題を討議によって解決していくという民主主義の手段として捉えた。つまり Rodriguez

(2001) は、AM を社会的な相互作用としての役割を持つコミュニケーション媒体として捉え、その役割を強調しているのである。

Rodriguez の「市民メディア」の概念に近いのが、Dagron (2004) の「参加」を強調した AM の捉え方である。Dagron (2004: 46) は、オルタナティブなコミュニケーションは、参加型コミュニケーションの核心部分であるとし、オルタナティブな精神は、普通の人びとが参加するという構成要素が最小化されたり、除外されたりしない限り、失われることはない」と指摘している。この「参加」を強調した概念は、オルタナティブなジャーナリズムにおける「参加ジャーナリズム」(Singer 2011; Domingo, *et al.* 2008) の概念や実践とも密接な繋がりを持つとみられる。

また Tracy (2007) は、AM がこれまで自分たちの生活に影響を与える出来事に対して、単なる観客だった人びとを、能動的な参加者に変身させる役割を持っていると指摘している。一方、Vatikiotis (2005) は、AM のプロジェクトを、一般の人びとが社会参加することで得られる「生きた経験」をベースにしている点を強調しており、AM の実践全体の枠組みは、シティズンシップ (= 市民権) を創出するプロジェクトと捉えることができるとしている。

## 5. オルタナティブ・ジャーナリズム

オルタナティブ・ジャーナリズムは、Atton (2007) が挙げている「市民ジャーナリズム」の定義を拡大し、ネット時代になって目覚ましい発展を遂げている新たなジャーナリズムとして類型化したものである。この分野の研究では、マスに向けた情報発信を行なう個人ブログや SNS から、欧米で目覚ましい発展を遂げている新興ニュース・サイトのジャーナリズムの実践、また主流/オルタナティブ両者のジャーナリズムの実践がハイブリッド化、同質化してきている状況などが指摘されている (Kenix 2011; Curran 2010)。

インターネットによる情報発信の技術的な環境が

整ったことで、ジャーナリズムの実践を目的としたオルタナティブ・メディアが近年急速に増加している。無料や廉価で誰もが簡単にブログサイトを始められるだけでなく、無名であってもコンテンツが良ければアクセスランキングの上位にランクされたり、記事のシェア、リツイートなどで何十万、何百万もの読者を集めたりすることも可能となった。

また、近年「デジタル・ネイティブ」と呼ばれるオンラインのみで配信される新興ニュース・サイトが、ハイテク分野のベンチャー企業のようにクラウド・ファンディングや投資家からの資金調達で事業を始める「スタートアップ」という形態で次々と誕生している。また、数は少ないものの、米国の ProPublica のような億万長者からの巨額な寄付を基金にして運営される非営利メディア組織も設立されている。

これら新興ニュース・サイトは、インターネットの登場以降、広告収入が減少し経営難に陥った新聞・雑誌などの主流メディアが弱体化し、以前のように実践できなくなった調査報道のジャーナリズムの担い手にもなっている。また、それらのサイトは、行き過ぎた商業主義や伝統的な規範・慣習で硬直化してしまった主流メディアのジャーナリズムを反面教師にして、デジタル・テクノロジーを駆使した創造的なニュース制作・配信を実践している。

本研究レビューの作業と並行して、2015年1月から2月にかけて、米国で実施した AM を対象とする聞き取り調査では、新興ニュース・サイトの編集者やジャーナリストが自らの組織を「オルタナティブ・メディア」とラベルづけしている所はほとんどなかった<sup>15)</sup>。しかし、調査した全てのメディア組織で、設立目的や使命を聞いたところ、主流メディアとは違ったアジェンダ、視点、情報源、配信方法によってニュース制作を実践するためだと回答していた。AM の歴史的観点から見れば、新興ニュース・サイトの実践は、オルタナティブ・ジャーナリズムの実践に他ならないといえる。新興ニュース・サイトはインターネットの台頭によって突然現れたわけでは

なく、デジタル技術によって、それが顕在化したのではないだろうか。「オルタナティブ」なルーツを継承するメディアだという歴史的視点なしに、新興ニュース・サイトの存在意義や目的を正しく理解することはできないと考える。

Atton (2007) は、オルタナティブ・ジャーナリズムは、その実践を通して、真実、リアリティ、客観性、専門性、オーソリティ、信頼性などの主流メディアが築き上げた既成概念やプロのコミュニケーションを支配する制度(機関)を再検討し、異議申し立てをしていると指摘する。

例えば、プロのジャーナリストは「客観報道」という縛りがあるため、事実と価値を区別しなければならず、記事では自分の意見や立場を書くことはできない (Schudson 1981, 2001)。一方 AM では、当事者または専門家として自らの立場や意見を明確に表明できる。ジャーナリズムとしての AM の実践は、プロフェッショナル化したジャーナリズムの倫理や、規範、ルーチンを批判することになるのである (Hurcup 2003; Atton 2007; Atton & Wickenden 2005; Atton & Hamilton 2010; Forde 2011)。

実践レベルでは、主流メディアのニュース素材として市民ジャーナリズムがますます活用されてきていることが最近の研究で明らかになっている (Atton 2007: 22; Allan 2013; Kenix 2011)。テレビのプレイングニュースでは、たまたま事件や事故の現場にいた「目撃者」が家庭用ビデオカメラや携帯電話で撮影した映像や写真が使われることが非常に増えてきている。このような一般市民が行なうジャーナリズムは、「アクシデンタル・ジャーナリズム」(Allan 2013) などと呼ばれている。

また、主流メディアのニュース番組では、市民の声を伝える街頭インタビューの代わりに、個人のブログや SNS などでも主張されているコメントを、あたかも世論の声として取り上げたり、生放送の番組中 Twitter で寄せられたコメントを、リアルタイムで紹介したりするようになってきた。これと連動するように、近年、主流メディアと AM が協働するハイ

ブリッド化や、二つのメディアのコンテンツの同質化の進行も指摘されている (Atton 2007; Curran 2010; Kenix 2011)。

以前から、コミュニティ・メディアなどでの AM の制作が、実際には主流メディアや商業メディアの内部で行なわれているケースが多いことが指摘されていた (Deuze 2006; Jenkins 2006; Atton 2007)。近年のハイブリッド化・同質化は、人的レベル、コンテンツレベル、経済レベル、配信レベルなど多岐にわたっており、今後、主流メディアとオルタナティブ・メディアとの新しい関係が新しいジャーナリズムの動きとして研究対象になる傾向がある。

#### まとめ オルタナティブ・メディア研究の現状と課題について

本稿では、2000年から2014年に発表された AM に関する主要論文・著書の論点を整理することで、AM の特徴的な機能を5つに類型化し、提示していった。そして、AM を、これら5つを代表的な機能とする、まさに多様なメディアの集合体であると捉えた上で、これまで困難と言われていた AM の総括的な定義づけをおこなった。

これら5つの AM の特徴は、歴史的視点から見て AM の原点とも言える社会変革・政治変革を目的とする「ラディカル・メディア」および「社会運動のメディア」(Downing, *et al.* 2001; Atton 2002b; Platon & Deuze 2003) であり、寡占化・グローバル化する「支配的メディア権力への対抗勢力」(Couldry & Curran 2003; Dagron 2004; Curran 2011) としての AM であり、批判的なコンテンツを広範囲に発信することで対抗的公共圏を作り出すことを目指す「批判的メディア」(Fuchs 2010) であり、普通の人びとが自分たちの手で自分たちのメディアを持つことでエンパワーメントして「市民メディア」(Rodriguez 2001; Schaffer 2007) であり、さらにはネット時代になって顕在化し拡大している「オルタナティブ・ジャーナリズム」(Hurcup 2003,

2005, 2013; Atton & Wickenden 2005; Atton 2007; Atton & Hamilton 2010; Forde 2011) であった。

従来の AM 研究では、主流メディアと AM を二項対立的に捉えて比較することで定義づけし、その特徴を明らかにするという分析方法が主流であった。しかし、この手法では AM が主流メディアの評価尺度で判断されてしまい、AM は常に、小規模で、資金不足で、コンテンツは偏向し、質が低く、面白さに欠けるなど、ネガティブな面が強調され、過小評価されることに繋がっていた。

AM は主流メディアと別次元の存在意義を持っている以上、主流メディアの評価尺度を AM に当てはめることの不適切さは強調されるべきであろう。AM は、多様なメディアの集合体であり、その評価は AM の中でも単一の尺度では測ることができないのである。

これらの考察を踏まえて、今後の AM 研究の課題を概観していく。まず、AM のオーディエンスについての研究が遅れており、詳細が把握されていない (Downing 2003; Atton 2007)、との指摘に応える研究の必要性である。オーディエンスがどのように AM を使っているのか、AM (特に Twitter や Facebook などの SNS) がどのようにオーディエンスを動員しているかの研究も、近年になってようやく始まったばかりである。

ネット時代では、オーディエンスがメディアの制作者であることは珍しくなくなった。そのようななか、オーディエンスが利用者として参加していることの意義や問題点についても明らかにする必要があるだろう。つまり「アクティブ (能動的な)・オーディエンス」の概念を超えた、マスメディアの制作したメディアテキストを「対抗的」に読み取るオーディエンス (Fiske 1992) という視点への要請に応える必要性が痛感されるのである。

さらに、この研究領域で、特定分野の研究が見逃されている点が課題として挙げられる。その筆頭として、大衆文化を扱う AM が指摘されている (Atton 2007)。この領域は、政治的な AM の活動と

比べて、殆ど研究対象とみなされておらず、特に何かのマニアやファンが運営・出版する AM の研究は未開拓といってよい状態にある。

Atton (2007) の指摘に沿って言うならば、AM は政治や社会的コンテンツに限らず、趣味など幅広い領域が含まれるべきであり、大衆文化 (=サブカルチャー) が主流文化に与える影響を過小評価すべきではなく、ますます研究領域を広げる必要性が実感される。

次に指摘したいのは、政治領域での AM の研究対象に偏重が見られる点である。先行研究では、社会主義やアナーキズムなどの政治的イデオロギー (主に左翼イデオロギー) や、政治・社会改革を目的にするメディアが主な研究対象になっていた (Downing, *et al.* 2001; Platon & Deuze 2003)。一方、保守派のイデオロギー、特定人種や性的マイノリティへの差別・中傷を目的とする AM の研究、さらにはテロや暴力を提唱し人びとを煽動する AM を批判的に分析する研究はまだ少なく、今後の取り組みが必要である (Atton 2007: 23)。

インターネットの台頭により AM のカバー領域も、影響力も、急速に拡大しているなか、ポジティブな面だけでなく、ネガティブな面も含めて、今後はさらに多角的な AM 研究が求められている。特にオルタナティブ・ジャーナリズムは、新興ニュース・サイトが台頭するなか、今後さらに研究領域を拡大、深化させる必要性が、本稿で AM 研究をメタ分析する中から新たな知見として獲得されている。

英国、米国、日本では、それぞれメディア環境の違いが大きいことを踏まえたうえで、本稿で考察してきた米英の AM 研究の概念を、どのように日本の社会状況のなかでローカライズしていくべきか、最後に、その展望について考えてみたい。新興デジタル・メディアが既存メディアと肩を並べるようになってきている米国などに比べると、日本では、現時点では、依然主流メディアが情報発信を中心的に担っていると言える。

とはいえ、東日本大震災や福島第一原発事故を契

機に、インターネットから発信されるニュースメディアや個人ブログなど既存メディア以外の情報源が認知され、FacebookやTwitterなどのソーシャルメディアも、仲間同士の親密なやり取りだけでなく、より多くの人に向けたオルタナティブな情報発信のツールとして広がりつつある。

またその一方で、2013年には、朝日新聞をパートナーに「ハフィントン・ポスト」が、また2015年にはバイラルメディアの旗頭である「バズフィード」がYahoo! JAPANと手を組んで日本版をスタートさせるなど、米国発の新興・デジタル・メディアが次々と日本に上陸している。市民メディアとして韓国から輸入された「オーマイニュース」は、日本では失敗に終わったが、米国生まれの新興デジタル・メディアは、米国でそうであるように日本の既存メディアを脅かす存在になりうるのだろうか。スタート時から大手既存メディアと提携しているなかで、「ハフィントン・ポスト」や「バズフィード」がどこまでオルタナティブな役割を果たしていけるのかは未知数であり、今後の動向が注目される。

デジタル化の進展により、日本のメディア環境も大きな変革期にある。新興デジタル・メディアは新しい衣をまとった既存メディアの同類なのか、多様な視点や情報を発信し民主社会に貢献するメディアなのか、AMの概念で分析することで、それらメディアの真価が明らかになるのではないかと考える。

## 註

- 1) AMは一般的に、主流メディアの外側に存在するメディアと定義される。しかし、Google News、Yahoo Newsなど大手ポータルサイトのニュースサイトは、アルゴリズムで掲載するニュースを選択するアグリゲーションサイトなのでAMには含まれない。Pew Research、Columbia Journalism Reviewなどメディア調査期間、研究部門を持つ出版組織に倣い、大手メディアが買収・資本投下しているオンライン・ニュース・メディアはAMの範疇に含めた。このような資本関係、コンテンツ提供でのパートナーシップ関係は、主流メディアとAMの境界線を不明瞭にしている原因の一つになっている。
- 2) Social Science Citation IndexでAMをタイトルに含む論文は44編のみである(2010年3月現在)。これとは対照的に、パブリックリレーション(PR)をタイトルに含む論文は1656編にのぼった(Fucks 2010: 174)。
- 3) 本稿では、ブログやSNSを通じた情報発信のうち、私的な情報共有ではなく、ある特定のコミュニティ(地理的に形成されるコミュニティ及び、オンライン上のバーチャルなコミュニティ)もしくは、不特定多数の読者、視聴者を想定して情報を発信している媒体をAMと定義する。
- 4) 例えば、過去30年以上にわたりジャーナリズム的な実践を行ってきた「労働者新聞」「フェミニスト新聞」もしくは「アングラ・メディア」のような出版物を、まとめてAMとラベル付けすることで、それまでバラバラな存在であったものが、集合体として一つのメディア領域となり、はじめて包括的に指し示すことが可能になるのである(Gibbs & Hamilton 2001)。  
それらのメディアは、それぞれが多様な目的やゴールをもっているため、AMという呼び名で一括りにしてしまうと、一つ一つのユニークな特徴は軽視されてしまうかもしれない。しかし、包括的なラベルづけをすることで、AMとしての存在意義が浮かび上がってくるのである。
- 5) 「リゾーム」とは、ドゥルーズとガタリの共著『千のプラトー』(1987=1994)の中に登場する比喩的概念で、伝統的な学問体系の「ツリー」モデルに対抗し、中心も始まりも終わりもない、多方に錯綜する地下茎のような「リゾーム」のモデルを提唱した。
- 6) Comedia (1984)は、小規模なオルタナティブ・メディアを「オルタナティブなゲッター」として特徴づけた。それらメディア組織は、運営資金や人材、情報などの資源が欠乏しているため、質の高い番組作りができず、政治への関連性や影響力を欠いてしまうと指摘している。
- 7) そこでの制作物は、組み替え可能なネットワークの特質を上手に活用し、利用者に遍在性と双方向性を提供することで、創造的なプロジェクトを

つくり出しているとしている。これらのメディア・プロジェクトは支配的勢力への対抗, 批判を主な目的としているが, メインストリーム・メディアや文化を批判するだけでなく, 時にはそれらの構成要素になったり, 介入することもあるという (Lievrouw 2011: 19)。

- 8) 「オルタナティブ・コンピューティング」は, 1960年代, 70年代の熟練プログラマーたちの中で共有されたリバタリアンや対抗カルチャーの価値観や, コンピューティングは進歩的な社会変革であり自己表現の力になるとする「ハッカー倫理」の影響を受けている (Nissenbaum 2004; Lievrouw 2011: 24-25)。
- 9) 「フォークソノミー」とは, folk (人々・民衆) と taxonomy (分類法) の合成語で, インターネット利用者がネット上の情報に対してタグ (分類・検索のためのキーワード) を付けることによって実現される分類方法のことを指す (出典: IT用語辞典 バイナリ)。
- 10) 多様で少数の人々でしかシェアされていない情報や, 特定地域に限定されていたり, 個人的なアマチュアが情報源となっている情報を指す。
- 11) Atton (2002a) は, 基本的には, AM のメンバーはプロではなく, ジャーナリストとしての訓練は僅かか又は全く受けていないアマチュアで, 市民として, コミュニティのメンバーとして, 活動家として, もしくはファンとしての立場で記事を書いているとしている。
- 12) 一般的に AM 研究の出発点は, 1984年に出版された Downing の著書 *Radical media (the first edition)* だと見なされている (Atton 2007)。
- 13) そしてそれらが実践しているメディア形態は, 新聞, 雑誌, ラジオ, テレビ, ブログ, ホームページ, ポータルサイト, SNS (Facebook, Twitter など), 動画サイト (YouTube, Vine), パンフレット, ポスター, 同人誌 (Zine), ファンの同人誌 (Fan Zine), グラフィティ, 街頭演劇, 歌, 音楽, 自費出版, インディレコードなどが含まれていた。
- 14) Fraser (1992) をはじめとする多くの研究者が, ハーバーマスのブルジョア公共圏では, 女性や貧乏人など人口の大多数が除外されている点を批判した。これを受けて, ハーバーマスは初期の理論

を訂正し, 後になって労働者階級や女性などもオルタナティブな公共圏に追加している。その修正を行なう上で, ハーバーマスは新たな公共圏の形成を支援するために, 討論に必要な情報を提供する AM や, メディア上の公開討論としての AM の可能性を提起している (Waltz 2005=2008)。

- 15) 筆者は, 2015年1月から2月に米国ニューヨーク, フィラデルフィア, ワシントン D.C. の新興デジタルメディアの編集者・記者に聞き取り調査を行った。質問項目は, 各メディア組織の設立目的・使命, 組織・運営形態, ニュースの決定要因, 情報源, イデオロギーなどであった。調査を行った全ての組織で, 情報の送り手側は, 主流メディアとの差別化を意図的に図っており, そこでのジャーナリズムの実践は, 歴史的文脈でのオルタナティブなジャーナリズムの実践であることが示唆された。

#### 参考文献

- Allan, S. (2013) *Citizen witnessing: Revisioning journalism in times of crisis. Key concepts in journalism*. Cambridge, UK: Polity Press.
- Atton, C. (2007) "Current issues in alternative media research." *Sociology Compass*, 1(1): 17-27
- Atton, C. (2002a) *Alternative media*. London, UK: Sage
- Atton, C. (2002b) "News cultures and new social movements: Radical journalism and the mainstream media." *Journalism Studies*, vol.3: 491-505
- Atton, C. & Hamilton, J. F., (2010) *Alternative journalism*. London, UK: Sage
- Atton, C. & Wickenden E. (2005) "Sourcing routines and representation in alternative journalism: A case study approach." *Journalism Studies*, vol. 6(3): 347-359
- Bailey, O. G., Cammaerts, B., & Carpentier, N. (2007) *Understanding alternative media*. Berkshire, UK: Open University Press
- Bourdieu, P. (1991) *Language and Symbolic Power*. Cambridge, UK: Polity Press
- Bruns, A. (2003) "Gatewatching, not gatekeeping:

- Collaborative online news.” *Media International Australia Incorporating Culture & Policy*, 7(3): 359-77
- Carpentier, N., Lie, R. & Servaes, J. (2003) “Community media: Muting the democratic media discourse?” *Continuum: Journal of Media & Cultural Studies*, 17(1): 51-68
- Carroll, W.K. & Hackett, R.A. (2006) “Democratic media activism through the lens of social movement theory.” *Media & Culture Studies*, 17(1): 51-68
- Couldry, N. (2002) “Mediation and alternative media, or relocating the centre of media and communication studies.” *Media International Australia*, (103): 24-31
- Couldry, N. & Curran, J. (2003) *Contesting media power: Alternative media in a networked world*. Lanham, MD: Rowman and Littlefield
- Curran, J. (2011) *Media and democracy*. London, U.K.: Routledge
- Curran, J. (2010) “The future of journalism.” *Journalism Studies*, vol. 11(4) 464-476
- Dagron, A. G. (2004) “The long and winding road of alternative media.” In *The SAGE handbook of media studies*. (eds.) Downing, J., McQuail, D., Schlesinger, P., & Wartella, E., London, U.K.: Sage Publication
- Deuze, M. (2006) “Ethnic media, community media and participatory culture.” *Journalism: Theory, Practice and Criticism*, vol. 7: 262-280
- Domingo, D. et al. (2008) “Participatory journalism practices in the media and beyond.” *Journalism Practice*, vol. 2(3) Special issue: The Future of Newspapers, 326-342
- Downey, J. & Fenton, N. (2003) “New media, counter publicity and the public sphere.” *New Media & Society*, vol. 5(2) 185-202
- Downing, J. et al. (2001) *Radical media: Rebellious communication and social movements*, London, U.K.: Sage Publications
- Downing, J. (2003) “Audiences and readers of alternative media: The absent lure of the virtually unknown.” *Media Culture & Society*, 25(5): 625-645
- Fenton, N. (2009) *New media, old news: Journalism and democracy in the digital age*. London, U.K.: Sage Publications
- Fiske, J. (1992) “British cultural studies and television.” (in) *Channels of discourse, reassembled, 2nd ed.*, (ed.) Robert C. Allen. London, UK: Routledge
- Forde, S. (2011) *Challenging the news: The journalism of alternative and community media*. London, UK: Palgrave MacMillan
- Fraser, N. (1992) “Rethinking the public sphere: A contribution to the critique of actually existing democracy,” (in) *Habermas and the public sphere*, (ed.) Craig Calhoun. Cambridge, MA: MIT Press.
- Fuchs, C. (2010) “Alternative media as critical media.” *European Journal of Social Theory* 13(2): 173-192
- Gibbs, P. L. & Hamilton, J. (2001) “Alternative media in media history.” *Media History*, vol. 7(2): 117-118
- Giddens, A. (1986) *The constitution of the society: Outline of the theory of construction*. Reprint version. Los Angeles, CA: University of California
- Gillmor, D. (2004) *We the media: Grassroots journalism by the people for the people*. Sebastopol, CA: O'Reilly Media
- Habermas, J. (1962=1994) *The structural transformation of the public sphere*. (The original book is written in German and was translated into English in 1989. (邦訳『公共性の構造転換：市民社会の一カテゴリーについての探究』第2版 細谷貞雄, 山田正行訳. 未来社 1994年)
- Hamilton, J. (2000) “Alternative media: Conceptual difficulties, critical possibilities.” *Journal of Communication Inquiry*, 24(4): 357-78
- Hamilton, J. & Atton, C. (2001) “Theorizing Anglo-American alternative media: toward a contextual history and analysis of US and UK scholarship.” *Media History*, vol. 7(2): 199-135
- Harcup, T. (2013) *Alternative journalism, alternative*

- voices*. London, U.K.: Routledge
- Harcup, T. (2005) "I'm doing this to change the world': Journalism in alternative and mainstream media." *Journalism Studies*, 6(3), 361-374
- Harcup, T. (2003) "'The unspoken - said' The journalism of alternative media." *Journalism*, 4(3), 356-376
- Jankowski, N. (2006) Creating community with media: History, theories, and scientific investigations. (in) *Handbook of new media: Social shaping and social consequences of ICTs*. (eds.) Lievrouw, L.A. & Livingstone, S. London: Sage
- Jenkins, H. (2006) *Convergence culture: Where old and new media collide*. New York: New York University Press
- Kenix, L. J. (2011) *Alternative and mainstream media: The converging spectrum*. London: Bloomsbury Academic
- Kessler, L. (1984) *The dissident press: Alternative journalism in American history*. Newsbury Park: SAGE
- Lievrouw, L. (2011) *Alternative and activist new media*. Cambridge, U.K.: Polity
- McQuail, D. (1994=2010) *Mass communication theory: An introduction, 3<sup>rd</sup> edition*, London: Sage (邦訳『マス・コミュニケーション研究』原著第5版(2005)の全訳 監訳: 大石裕 慶応義塾大学出版会 2010年)
- Mouffe, C. (1992). "Democratic citizenship and the political community." (in) *Dimensions of radical democracy: Pluralism, citizenship, community*, (ed.) Chantal Mouffe. London, UK: Verso
- Negt, O. and Kluge, A (1972=1983) "The proletarian public sphere." (in) *Communication and Class Struggle*, vol. 2: Liberation, Socialism, translated from the German by Stuart Hood, (eds.) Armand Mattelart and Seth Siegelaub. New York: International General, 1983)
- Nissenbaum, H. (2004) "Hackers and the contested ontology of cyberspace." *New Media & Society*, vol. 6(2): 195-217
- Norris, P. (1999) *Critical citizens: Global support for democratic government*. Oxford, UK: Oxford University Press
- Platon, S. & Deuze, M. (2003) "Indymedia journalism: A radical way of making, selecting and sharing news?" *Journalism: Theory, Practice and Criticism*, 4(3): 336-355
- Rodriguez, C. (2001) *Fissures in the mediascape: An international study of citizen's media*. Cresskill, NJ: Hampton Press
- Schaffer, J. (2007) "Citizen media: Fad or the future of news? The rise and prospects of hyperlocal journalism." Available at [http://www.kcnn.org/research/citizen\\_media\\_report/](http://www.kcnn.org/research/citizen_media_report/)
- Schudson, M. (2001) "The objectivity norm in American journalism." *Journalism: Theory, Practice and Criticism*, 2(2): 149-170
- Schudson, M. (1981) *Discovering the news: A social history of American newspaper*. New York: Basic Books
- Singer, L. (2011) *Participatory journalism: Guarding open gates at online newspapers*. Chichester : Wiley-Blackwell
- Tracy, J.F. (2007) "A historical case study of alternative news media and labor activism: The Debuque leader 1935-1939." *Journalism & Communication Monographs*, 8(4): 267-343
- Vatikiotis, P. (2005) "Communication theory and alternative media." *Communication and Culture*, 1: 4-29.
- Waltz, M. (2005=2008) *Alternative and activist media*. Edinburgh, UK: Edinburgh University Press (邦訳『オルタナティブ・メディア: 変革のための市民メディア入門』訳: 神保哲生 大月書店)
- ドゥルーズ G. & ガタリ F. (1987=1994) 『千のプラトール: 資本主義と分裂症』河出書房新社訳: 宇野邦一, 田中敏彦, 小沢秋広. *A thousand plateaus: Capitalism and schizophrenia* (1987)
- フレイレ, P. (1970=1979) 『非抑圧者の教育学』訳: 小沢有作, 楠原彰, 柿沼秀雄, 伊藤周. 亜紀書房 *Pedagogy of the Oppressed*. (1970) New York: Continuum
- 吉見俊哉 (2004) 『メディア文化論』有斐閣アルマ

Alternative Media Research in the Digital Age :  
Rethinking the Concepts and Definitions of “Alternative” from Previous Western  
Studies Undertaken since 2000

FUJIHARA Hiromi<sup>i</sup>

**Abstract** : Research in alternative media has made progress in theorizing in this field, and has developed a research framework by casting off the conventional dichotomy of a “mainstream vs. alternative” perspective. Based on Atton’s study, the article examines the main literary works of alternative media studies in Western nations since 2000 by analyzing each concept, then rethinks and classifies the definitions and concepts of alternative media. Through this analysis, the article clarifies the current trends and issues of alternative media research. Regarding alternative media as a collective entity, containing various purposes, missions and characteristics, the article lists the names and concepts of each study, then proposes five categories of alternative media. These are (1) “radical and social movement media,” which aim to challenge social and political changes, (2) alternative media as “counter balance to dominant media power,” which have proceeded oligopolization and globalization, (3) “critical media,” which aim to create counter-public sphere, (4) “citizen’s media,” in which citizens are empowered by possessing their own media, and (5) “alternative journalism,” which represents burgeoning journalistic practices based on alternative news outlets in the digital age.

**Keywords** : alternative media, typology, radical media, social movement media, critical media, counter-public sphere, citizen’s media, alternative journalism

---

i Doctoral Program, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University